浮世絵と庶民信仰

——疱瘡絵をめぐる——

はじめに

まだ医学が発達していなかった時代、人々は呪術的な方法を用いてその脅威から逃れようとしていた。そのうちの一つである疱瘡絵は、疱瘡という病への呪術的な対抗法の一つとして近世社会で使用されていた浮世絵版画である。疱瘡絵については、すでにいくつかの先行研究が存在する。

H・O・ローテルムンドは『疱瘡神——江戸時代の病いをめぐる民間信仰の研究』¹のなかで、医学的史料や疱瘡への対抗法にまつわる民間信仰などを調査し、疱瘡神が庶民の間で信仰されるに至った過程を探っている。その中で、疱瘡絵には疱瘡に直接挑んで闘うような場面を描いたものが少ないのに対して、病気の治癒を予祝したり祝祭的世界を描いたりしたものが多く見受けられると述べ、この直接的な対抗表現の少なさは、疱瘡に対する人々の無

小林 香那子

力感を反映しているものと述べている。川部裕幸は「疱瘡絵の文献的研究」²において、疱瘡絵の定義付けの指標として、色と摺りの様式、描かれている内容、用途の三つを挙げ、これを前提としながら論を展開している。また、疱瘡絵がどのような流れで発生したのかについて、朱鍾馗の系統、玩具や芝居絵の系統、護符の系統の三つの系統が影響を与えたのではないかと推測している。藤岡摩里子は「浮世絵のなかの江戸玩具 消えたみみずく、だるまが笑う」³の中で、みみずくやだるまを描いた国芳の疱瘡絵などを挙げ、これらが疱瘡絵に描かれるようになった理由について述べている。また、藤井裕之は「疱瘡・麻疹にみる病観——疱瘡絵とはしか絵の比較——」⁴において、疱瘡絵と麻疹絵を比較し、両病の病観について論じている。そして、石垣絵美は「疱瘡絵の画題と疱瘡除け」⁵において、疱瘡絵を四四点収集し、それらの分析を通して、だるまや富士山、為朝などの画題についての検討、疱瘡に対する人々の対処の在り方などについて述べている。

しかし、H・O・ローテルムンドは二九点、最新の著述である石垣絵美でも四四点の疱瘡絵を収集・分析しているに過ぎない。これは疱瘡絵を分析する上で、作品数の面ではあまり十分な数とは言えないであろう。本稿は、これらの先行研究を踏まえつつも、改めて疱瘡絵を収集し、画題等について再検討を加えるものである。

一、疱瘡という病と「疱瘡絵」

疱瘡（天然痘）は、古来より日本人が闘ってきた流行病の一つである。日本における疱瘡の歴史について、川村純一は『病いの克服―日本痘瘡史―』^⑤の中で、日本史、医学、文学などの多数の文献史料を調査し、詳述している。

疱瘡の歴史は古く、文献史料にその病についての記述が認められるのは、『続日本紀』巻第十二、天平七（七三五）年の記述が最古である。以降も幾度も流行を繰り返し、江戸時代頃には疱瘡流行の間隔はさらに短くなっていた。^⑥疱瘡は一度経験すると二度はかからない病であることが知られていたため、人々は如何にして疱瘡を無事に乗り越えるかを考え、日常生活の中でその対策が必要不可欠になっていたのである。

それらの疱瘡への対策は「疱瘡除け」と呼ばれている。医学の知識が乏しいこの時代において、疱瘡は疱瘡神という疫病神によってもたらされるものだと考えられていた。疱瘡除けは、この疱

瘡神という疫病神を村や家から追い出すこと、または祀り上げることで疱瘡から逃れるために行われた対処法であり、その種類は主に「疱瘡神送り」「赤の呪的使用」「疱瘡守護神の信仰」「護符・貼り札」の四つに分けられる。

疱瘡神送りとは、村や家などの生活共同体で行う神送りの儀式の一つである。川村純一はその全国共通の形式として、棧俵に赤紙を敷き、起上り小法師二つと小豆飯を乗せて御幣を立て、村境や四辻などに設置するという方法を挙げている。^⑦

赤の呪的使用とは、古来より魔除け・災難除けの色とされてきた赤色を用いて疱瘡を避けようとした呪術的方法である。実際に、江戸時代の医師・香月牛山が記した元禄一六（一七〇三）年刊行の『小児必用養育草』巻四には、疱瘡に罹患したら寝室の屏風や衣桁に赤い衣類をかけ、病児も看病人も赤い衣類を着るという風習が存在していたという記述がある。^⑧また、疱瘡は瘡の色が赤ければ軽症であるとされていたため、疱瘡軽症への祈願から赤色が使用されたということも考えられている。つまり、疱瘡における赤色は、赤が持つ魔除けの力と軽症時の瘡の色との二つの面から用いられたと考えられる。そしてこの赤色は後述の疱瘡絵においても重要な意味を持つものである。

疱瘡守護神の信仰とは、社寺に祀られている疱瘡守護神を信仰することによって、疱瘡からの守護を祈願することである。主なものとしては、出雲の鷲大明神や伊豆・相模地方で信仰されていた妙正大明神などがある。^⑨

護符・貼り札は、主に家の戸口や屋内に貼って疱瘡神の侵入を防ぐ目的で使用されたものである。疱瘡絵はこの一種である。

以上が疱瘡除けの主な種類である。一八〇〇年代に種痘と呼ばれる疱瘡の医学的対処法が普及するまで、これらの呪的方法は庶民の間で信仰されていたのである。

前述の通り、疱瘡絵は疱瘡除けを目的として作られた浮世絵の一種である。別名「赤絵」と呼ばれ、その名の通り赤色一色で刷られたものと、多色刷りのものが存在する。疱瘡絵がいつから制作されるようになったのか、その起源について詳細は明らかになっていない。しかし、江戸時代の医師・橋本伯寿が一八一〇年に刊行した『国字断毒論』には「錦絵」などが寝所に飾られていたという記述があり、この「錦絵」は疱瘡絵のことであると推測される。また、太田素子の研究によると、山梨県山梨郡下井尻村の依田家には、寛延三（一七五〇）年から安政二（一八五五）年までに作成された疱瘡見舞帳が八冊現存しているという。これは依田家の子どもたちが疱瘡を患った際に贈られた見舞品の記録である。これによると見舞品の中に「紅絵」があり、寛延三（一七五〇）年に一点、明和四（一七六七）年に四点、安永七（一七七八）年に一点贈られている。よってこの資料からは一七五〇年までには疱瘡絵が存在していたことが読み取れる。さらに、鈴木勝忠の研究によると、延享二（一七四五）年の江戸の川柳集に「悟り得て今は達磨も紅絵にて」という句が収録されている。

川部裕幸は、これら三つの文献などから一八世紀後半には浮世

絵版画を疱瘡見舞いに贈る習慣が成立していたと断言している。その一方で、資料の中では「紅絵」という文言のみしか見受けられないため、疱瘡絵なのかどうかは不明であるとしている¹⁵⁾。

二、疱瘡絵の収集結果

今回疱瘡絵を収集するにあたって、主にインターネット上のデータベース¹⁶⁾を調査対象とし、その他ローテルムン¹⁷⁾ドや藤岡摩里子の書籍に掲載されている図版も調査している。

今回の調査では、先行研究を踏まえつつ以下の四つの条件の下で収集することとした。

- (1) 赤一色で刷られているもの（赤絵）
- (2) 多色刷りのうち、鎮西八郎為朝、鐘馗、だるま、みみずく、犬張子、うさぎ、春駒、金太郎、桃太郎、富士山、七福神、獅子舞、鯛、玩具などを画題としたもの
（明確に芝居絵、役者絵と判断されるものは除く）
- (3) 「疱瘡」の文言が入ったもの
- (4) 扇などの小物に「赤」の文言が入ったもの

その結果、一五二点の疱瘡絵を収集することができた。

内訳を以下にまとめる。まず、刷り色について分類すると、多色刷り七五点、赤絵六九点、墨摺絵八点である。今回の調査では

赤絵より多色刷りの絵の方が多く収集された。ただし、多色刷りの作品に関しては武者絵や物語絵などの要素が強い作品も五点含まれているため、それらは「疱瘡絵の可能性のある作品」であるということをお断りしておく。また、多色刷りより安価で広く流布されていたはずの赤絵が今回六九点しか収集できなかったのは、疱瘡が治癒すると川へ流されたり焼却処分されていたことが影響していると考えられる。

次に、絵師ごとに分類した結果を述べる。今回収集した一五二点の総絵師数は四三名であり、その他に絵師不明の作品が三二点存在する。絵師の内訳をみると、最も多く制作しているのは国芳で二二点あり、その次に重政が一六点、初代国貞（三代豊国）が七点、芳艶・芳盛が六点、清長・芳年が五点と続く。

絵師について分類する中で浮き彫りになったのは、疱瘡絵における歌川派の存在感の大きさである。今回収集した中に歌川派の絵師は一六名含まれており、これは総絵師数の三分の一を超えている。また、国芳を筆頭としたこのうち八名が三枚以上の疱瘡絵を制作しており、歌川派が制作した疱瘡絵の総数は七〇点である。これは、疱瘡絵の総数のうち絵師不明の三二点を除いた一二一点の半数以上を占めている。歌川派といえは、当時の江戸浮世絵界で一大勢力を築いていた一門である。これらの結果から、疱瘡絵は人気絵師たちにも取り組まれるジャンルだったということが分かる。

次に、画題による分類である。今回の調査で最も多く見られた

画題はだるまで四六点であった。以下、為朝三三点、金太郎二六点、鐘馗二二点、犬張子二一点、みみずく・鯛一八点、玩具二二点、春駒・うさぎ一一点、桃太郎・獅子舞・七福神一〇点、富士山九点、役者絵二点、その他八点となった。だるまは多色刷りと赤一色刷りの両方でよく見られる画題であるため、最も多くなつたのだと考えられる。また、これらの画題が成立した経緯や理由については、先行研究の中でも検討されている。今回の調査における疱瘡絵の収集結果報告は以上である。

三、疱瘡見舞品としての疱瘡絵

前述したように、川部裕幸は、一八世紀後半までに浮世絵版画が疱瘡見舞品として贈られる習慣が成立していたことを文献に基づいて述べているが、それらの文献にある「紅絵」が疱瘡絵だと確定できるのかについては不明だとしている。そこで、実際の作品の面からその論の裏付けを試みた。今回収集した作品の中で、一八世紀後半に制作されたと考えられるものは一六点である。その中で最も早く描かれたものは、清経が恵比寿と大黒を赤絵で描いた二作品で、どちらも清経の活動時期から宝暦七（一七五七）年～安永九（一七八〇）年のものと推測される。これらの作品から、疱瘡絵が一八世紀後半までに成立していたことが作品の面から証明できる。そのため、文献の中で「紅絵」と記されているものが疱瘡絵であった可能性は十分に考えられるのである。よつ

て、文献の記述から見て少なくとも一八世紀後半までに疱瘡見舞品としての疱瘡絵が成立していたとする川部の論は、今回実際の作品を提示したことでその可能性を高めることができると考えている。

四、画題について

今回の疱瘡絵収集の条件で示したように、疱瘡絵の画題は多種多様である。そのうちのいくつかは、先行研究において画題となった経緯や理由について検討されている。それらについて、画題と研究者を以下に列挙する。

- (1) 川部裕幸 (二〇〇〇)¹⁹⁾…鐘馗
- (2) 藤岡摩里子 (二〇〇八)²⁰⁾…みみずく、うさぎ
- (3) 石垣絵美 (二〇一七)²¹⁾…為朝、だるま、富士山、犬張子、玩具

このうち石垣は、為朝が疱瘡絵の画題に用いられるようになった時期について、為朝が画題として一般的になったのは滝沢馬琴の『椿説弓張月』刊行以後だと主張している。しかし、石垣が収集した為朝の疱瘡絵一六点には制作年代が示されておらず、『椿説弓張月』の刊行以前・以後に描かれた為朝の疱瘡絵の作品数について述べられていない。そこで本稿では、収集結果をもとに石垣の論についての裏付けを試みた。

今回の調査で収集した為朝の絵は三三点である。このうち、古典に制作年代が明記されていない作品は絵師の活動時期に基づいて判断している。その結果、このうち二作品は制作年代だと推測される時期に『椿説弓張月』の刊行年が含まれているため、『椿説弓張月』以前・以後の判断はできない作品となっている。しかし、それ以外の為朝絵のうち、制作年代不明の一二点を除く一八点は、『椿説弓張月』刊行以後に描かれたものと判断できる作品である。

現時点では制作年代不明の作品も多く、また収集しきれない疱瘡絵も数多くあることだろう。しかし、今回の調査によって、『椿説弓張月』の流通とともに、為朝の疱瘡神調伏の民俗信仰が流通していき、格好の「疱瘡絵」の画題となっていくという前掲の石垣の意見について、作品数の面からその可能性を裏付けることができるのではないかと考えている。

五、疱瘡絵のなかの役者絵

本稿の冒頭で挙げた先行研究の中では、藤井裕之が疱瘡絵において「役者を題材とした絵が多い」と述べている。しかし、藤井が対象とした疱瘡絵の作品数などは記されておらず、その根拠はよく分からない。また、その他の先行研究でも、役者という画題についてはあまり論じられていない。今回収集した疱瘡絵の中で、役者絵は二点確認されている。そこで、ここではこの二点の

役者絵を用いて、画題としての役者絵の役割について検討したい。

一つめは、二代目市川新之助を描いた赤絵である。これは文政八（一八二五）年末頃に初代国貞によつて描かれたものである。画中の新之助は「にらみ」の表情を見せている。これは市川團十郎家に代々伝わる見得の一種で、邪気を祓うものである。敢えて團十郎ではなく新之助がにらんでいる様子描いたのは、疱瘡に罹患するのが主に子どもだったことが関係しているのではないかと推測される。また、新之助はだるまやみみずくの模様が描かれた衣装を着ており、画中文字には「赤飯」や「軽〜」「軽き」「軽し」と、疱瘡除けの玩具や赤い食べ物、疱瘡が軽く済むように祈る言葉が盛り込まれている絵となっている。

二つめは、同じく市川家の役者がにらんで見せている様子を描いている。この役者は、出典元では二代目新之助の扱いとなっている。しかし、二代目新之助は長男であるにも関わらず画中に「二男新之助」と表記されていること、また五歳の時点で既に六代目海老蔵襲名後であることから、この作品に描かれているのは二代目新之助ではなく、その弟の市川重兵衛であると推測される。いずれにしても、疱瘡絵において市川團十郎家の「にらみ」は疱瘡除けに効果的な要素として描かれていたと考えられる。

以上二点の疱瘡絵を例に、疱瘡絵における役者絵の役割について検討した。これをまとめると、市川團十郎家に代々伝わる「にらみ」のような役者自身が持つ魔除けの要素を利用すること、

販売店側の販売促進を目的として役者の人気を利用することの、二つの役割を担っていることが考えられる。今回は以上のように考察したが、役者絵の収集が十分でない可能性は残っている。今後の疱瘡絵研究において疱瘡絵における役者という画題への検討がさらに進められることを期待したい。

おわりに

本稿では、疱瘡という病への呪術的対抗手段である疱瘡絵を二五二点収集し、その結果をまとめ、先行研究で示されている論への再検討や、画題の検討などを試みた。その結果を以下にまとめ、本稿の結びとする。

- (1) 川部裕幸は、「十八世紀後半までには浮世絵版画を疱瘡見舞品として贈る習慣が成立していた」と断定しながらも、文献に登場する「紅絵」が疱瘡絵なのかは不明であると論じている。本稿での疱瘡絵収集で一八世紀後半に制作された疱瘡絵が一六点見つかったことから、疱瘡絵が一八世紀後半には成立していたことが作品の面からも証明されることとなり、川部が指摘する文献中の「紅絵」が疱瘡絵である可能性は十分に考えられ、疱瘡見舞品として扱われていた浮世絵版画が疱瘡絵であったという一定の可能性を提示できるものと考えられる。

(2) 石垣絵美は、為朝が疱瘡絵の画題として用いられるようになったのは『椿説弓張月』の刊行以降であるとしているが、石垣が論文中で挙げた為朝の疱瘡絵には制作年代が明記されておらず、刊行以前・以後の為朝の作品数の比較も行われていない。そこで、筆者が収集した疱瘡絵の中から為朝絵を抽出して制作年代を調査した結果、制作年代不明の作品を除くと『椿説弓張月』刊行以降に制作されたものが大多数を占める結果となった。よって、この結果は石垣の論への裏付けとなると考えられる。

(3) 疱瘡絵の画題として「役者」が検討されている先行研究はあまり見受けられない。しかし、今回収集した二点の役者疱瘡絵から、市川家の「にらみ」など役者自身の肖像が魔除けの役割を果たしている点、また人気役者を疱瘡対処法の周知や販売促進の役割を担うため起用されている可能性を指摘した。疱瘡絵における役者という画題は、これらの重要な役割を担っていたと考えられる。

以上の三点が、本稿における疱瘡絵についての考察である。疱瘡絵の分析に関しては不十分な点もあるが、一定の成果を示すことができたと考えている。また、疱瘡絵を研究する上で疱瘡絵本にも触れる必要があるが、今回は字数の関係で扱うことができなかったため別稿に譲る。そして、今後の疱瘡絵研究の更なる発展を期待する。

注

(1) H・O・ローテルムンド『疱瘡神―江戸時代の病いをめぐる民間信仰の研究』岩波書店、一九九五年

(2) 川部裕幸「疱瘡絵の文献的研究」『日本研究 国際日本文化研究センター紀要』二一、国際日本文化研究センター、二〇〇〇年、一一七―一四五頁

(3) 藤岡摩里子『浮世絵のなかの江戸玩具 消えたみみずく、だるまが笑う』社会評論社、二〇〇八年

(4) 藤井裕之「疱瘡・麻疹にみる病観―疱瘡絵とはしか絵の比較―」『近畿民俗』一四二・一四三号、近畿民俗学会、一九九五年、一一―一六頁

(5) 石垣絵美「疱瘡絵の画題と疱瘡除け」『國學院雑誌』一一八巻七号、國學院大學、二〇一七年、一九―四三頁

(6) 川村純一「病いの克服―日本痘瘡史―」思文閣出版、一九九九年

(7) 「是の歳、年頗る稔らず。夏より冬に至るまで、天下あめのた豌豆瘡ひょうとうかく俗に裳瘡ももがさと曰ふ。を患む。天あまくして死ぬる者多し。」青木和夫、稲岡耕二、笹山晴生、白藤禮幸校注『続日本紀』二（新日本古典文学大系一三）岩波書店、一九九〇年、二九九頁

(8) 富士川游著、松田道雄解説『日本疾病史』平凡社、一九六九年、一一一頁

(9) 前掲注(6)、二八一頁

- (10) 「屏風衣桁に、赤き衣類をかけ、そのち(こ)にも、赤き衣類を著せしめ、看病人も、みな赤き衣類を著るべし、痘の色は、赤きを好とする故なるべし」同文館編輯局編『日本教育文庫 衛生及遊戯篇』同文館、一九一一年、三二〇頁
- (11) 前掲注(1)、三三一―三六頁
- (12) 「親族知音よりおもひく」に当世の錦絵・干菓子・餅・酒・或ひは絹布・衣類など我ましに贈りたるを痘瘡病の寝処のあたり処せくまで飾かけて、其品の多を其家の面目とす。」橋本伯寿『国字断毒論』(森嘉兵衛、谷川健一編)『日本庶民生活史料集成』第七巻、三一書房、一九七〇年)一〇七頁
- (13) 太田素子「近世農村社会における子どもをめぐる社交―甲斐国山梨郡下井尻村依田家文書を手がかりに」『国立歴史民俗博物館研究報告』五四、国立歴史民俗博物館、一九九三年、一六三―一九三頁
- (14) 鈴木勝忠編著『続雑俳語辞典』明治書院、一九八二年、四三七頁
- (15) 前掲注(2)、一三四頁
- (16) 今回調査対象としたデータベースは以下の七つである。
立命館大学アート・リサーチセンター、浮世絵ポータルデータベース <http://www.dh-jac.nu/db/nishikie/search_portal.php> 二〇一七年二月一日閲覧
くもん子ども浮世絵ミュージアム <<https://www.kumon-ukiyoe.jp/>> 二〇一七年二月一日閲覧
- Japanese Woodblock Print Search - Ukiyo-e Search <<https://ukiyoe.org/>> 二〇一七年二月一日閲覧
早稲田大学演劇博物館、浮世絵データベース <[http://archive.waseda.jp/archive/subDB-top.html?arg={%22item_per_page%22:20,%22sortby%22:\[%22179a%22,%22ASC%22\],%22view%22:%22display-simple%22,%22subDB_id%22:%2252%22}&lang=jp](http://archive.waseda.jp/archive/subDB-top.html?arg={%22item_per_page%22:20,%22sortby%22:[%22179a%22,%22ASC%22],%22view%22:%22display-simple%22,%22subDB_id%22:%2252%22}&lang=jp)> 二〇一七年二月一日閲覧
東京都立中央図書館、TOKYOアーカイブ浮世絵 <<http://archive.library.metro.tokyo.jp/da/searchDetail?category=%E6%85%A4%E4%B8%96%E7%B5%B5>> 二〇一七年二月一日閲覧
国立歴史民俗博物館、館蔵資料画像データベース <http://www.rekihaku.ac.jp/up-cgi/login.pl?p=param/syuz22db_param> 二〇一七年二月一日閲覧
内藤記念くすり博物館、人と薬のあゆみほうそう <<http://www.eisai.co.jp/museum/history/b1500/600.html>> 二〇一七年二月一日閲覧
- (17) 前掲注(1)
- (18) 前掲注(3)
- (19) 前掲注(2)、一三六―一三七頁
- (20) 前掲注(3)、一七―四六頁
- (21) 前掲注(5)、二六―三三頁
- (22) 前掲注(4)、五頁
(つばやし・かな) 二〇一七年度本学卒業生)